

# 新聞記事にみる福生昭和史の一断面

——生産の場・軍都・女たち

内田祥子

## はじめに

一九四五年の敗戦をはさんだ前後二十年間（一九三五年から一九五五年）の福生、熊川を中心とした周辺の様子を知るために、当時の「読売新聞」Ⅱ「三多摩読売」（以下「多摩版」とする）を府中市立中央図書館の好意で一覧することができた。

今回、新聞記事を追いかける形で、多摩の様子をまとめてみたいと思うが、二十年間という限られた期間の人々の生活や村々の変化を、一紙のみの記事からだけでまとめるには、限界があり不十分である。また、新聞記事そのものが柳田国男が『明治大正史世相篇』で書いているように「現実の社会事相はこれよりもまたはるかに複雑でわずかに一部を覆うておらず……いわゆる尖端的なもののみが採

録せられ……生活のもっとも尋常平凡なもの新たな事実として記述せられるような機会が少ない」ということを、最初に頭に入れておきたい。

この時代は報道統制体制下であり自由な報道ができにくかった。しかし新聞も送り手と受け手の相関関係にある以上、不十分ながらも世論の反映や人々の本音がどこかに隠されているのではないかと思いつつ読んできた。

まず一九三五年の多摩版から拾い上げた多くの記事から、福生、熊川を中心に目についたものを少し長くながるが書き出してみる。

- 多摩水電の引水により多摩川流水涸渇(1)
- 蚕繭統制反対運動 俄然尖鋭化(2)
- 西郡養蚕組合で十四ヶ村に技術員を常置(3)
- 郷軍模擬動員、福生など西多摩の各村(4)

○軍人志願を家人に反対され家出、福生村の呉服店員(5)

○多摩川の生命破壊する砂利盗掘に対し採掘禁止令と取締(6)

○「福生村の予備歩兵伍長、森田喜作、満州にて敵中に突入し奮戦、破格功七級を賜る(7)」と一段目に大きな見出し

○西多摩郡では荒木大将を迎え国防協会準備に着手(8)

○福生村境より清敵院橋迄の府道の改修工事が完成、第二期工事 熊川村迄(9)

○福生村でも託児所開かる。農家の子女のみ、四歳から七歳の九十名あまり、保母三名で(10)

○熊川村地先補給部拡張用地も登記終了、工事に着手(11)

○陸軍用地問題による熊川村の小作争議解決(12)

○この夏西多摩の各地で猩紅熱、疫痢、赤痢、チフスなどの伝染病が多発、女性の発狂記事も三つ。

○愛国婦人会西多摩郡部会、五日市小学校で組織の拡大を呼びかける(13)

○熊川村の村校が西郡のトップを切つてその名も「国防色」学童が制服着用(14)

○「西多摩では空地を徹底利用して青果三多摩出現(15)」を目指し

○西郡農会では女性の意見を聴く会を設け更生の徹底をはかる(16)

○奥多摩川の魚族を守れと漁業組合が東京市へ陳情(17)

○膨れた三多摩、人口一万以上の町村が七ツ(18)

○東秋留村に争議？ 納米五割減額を叫んで小作人四百人起つ(19)

○福生村で自作農の転落を救う組合結成(20)

○福生村で農事改良実行組合の養兎鶏卵大根の品評会(21)

○福生村、緬羊の共同飼育トップ切る。無償貸付申込殺到(22)

こうして並べてみると、その時代の空気が幾分なりとも感じられると思う。

一九三〇年代は一九三一年の「満州事変」に始まり、「五・一五事件」「国際連盟脱退」「華北進攻」「二・二六事件」、そして一九三七年の「日中戦争」へとつき進む激動の時代であった。北海道や東北の農村では度重なる凶作によって、出稼ぎや娘の身売りなどでやっと生活を支えているという状況であった。

これらの新聞記事を通して、とりあえず私を感じた事、関心を持った事を、次の三つに分けて検討してみたいと思う。

① 生産の場としての多摩 当時の多摩は東京市の「都」に対して「鄙」の立場であったこと。つまり帝都に對する地方、消費地に対して生産の場であったこと

② 軍都として飛躍していく多摩 国の中枢機関の集中

する東京市から最も近い地方として期待され、担っていく多摩の姿

③ 多摩の女性たち 彼女たちはどのようなようにして戦争に参加させられていったか、戦後の女性達は？

### 生産の場としての多摩

二年前、私は始めて京王帝都線府中駅に降り立った。駅から大国魂神社境内にある図書館迄の歩いて数分の距離のそこここに、八百屋や果物屋がいやに目についた。数えてみると十軒近くもある。古い三多摩読売を読み進めていた感じから、現在もなお近郊農産地として生産にたずさわる多摩の姿が浮かび上ってきた。あらためて府中も多摩なのだということが、八百屋の店先のバケツやざるに山盛りになって売られている旬の野菜や果物から伺えた。都心で日頃目にするバック入りの形の整ったきれいな物ではなくて、もう少し不揃いで素朴な感じの品々がかなり安く売られている。

新聞でみると、一九三五年頃の西多摩郡下の農家では、陸稲・麦・蕎麦類・大根などの畑作を中心に、茶・梅の実・西瓜・梨・柿などの果実類、近くに織物の町八王子を控えていたこともあって、桑の栽培と養蚕、そして鶏・兎・豚などを飼い、生計をたてているというのが一般的であった。輸出用の百合根の栽培や農耕馬・乳牛の飼育なども行われ

ていたが、社会状況の変化から百合根の栽培は減る傾向にあった。農閑期には副業として村ぐるみで新しい生産に取組み、国策としての軍馬の調達、軍需品としての羊毛、毛皮用の綿羊、兎等の飼育などに力を入れていくというのも時勢の要求に応じたものであった。西多摩郡下の村々では、度々品評会や試食会などを催し品質の向上に努めていた。

日中戦争の長期化は多摩地方への期待を増し、「衰えゆく農村に活、五ヶ年計画(26)」「空地の徹底利用(27)」を呼びかけ、「郷里の食物を戦線へ、農村関係者の熱が足らぬ。労力不足は共同で補え(28)」とハッパをかけられる。多摩地方はこのころ、「登記簿が語る蝕れる耕地、郊外宅地化の激増(29)」「俄かに発展、新しい町小金井(30)」などの記事に見られるように宅地化が進み、それに伴う人口増と、飛行場、航空機製造工場などの非常時産業の拡大で、より一層人口が増えた。にもかかわらず農村の人口はインフレ・不況による働き手の流出(多くは軍需工場への就職)、出征による男性の働き手の不足で、女性や子供達の労働力が叫ばれるようになってくる。福生村でも不況続きから、村内の自作農家が従来の耕地を離れ小作農になっていく傾向がみられるし、工場への転出防止も切実な問題となっている。こうした中でも各村々は税金の完納を呼びかけ、それに応えての報国ぶりは見事である。「土に帰れ」と叫ばれつつも、西多摩郡下の農業統計によれば、小作農の増加が見ら

れ、農家の窮状は続く。冷雨だ、早ばつだ、雪だと天気模様に一喜一憂の記事や、動植物の病気に關するもの、熊やもぐらや野兔による被害、はては「はえとり五日市の捕獲數百六十万びき<sup>(28)</sup>」「西郡下の駆除成績、尺取虫一千万尾<sup>(29)</sup>」等の記事など、いかにも多摩版らしい。

賭博の記事もテラホラ見られるのは、こちら辺の江戸以来の伝統なのだろうか。しかし一九三〇年代の後半ともなると、日中戦争による兵隊の死亡記事も多く、あからさまに敵愾心をあおるような記事も増え、相手を殺すことが美談として報ぜられる様になってくる。

このころ山間部に近い西多摩郡では、奥多摩にかけて盛んに木炭・炭などの増産に励み、その活氣の様がいくつかの記事から伺えるのだが、恒常的な戦時下における燃料不足には追いつけず、人手不足の悩みや森林の伐採等から生じる問題を後に残すことになる。多摩川流水の涸渇や砂利盜掘、貯水池工事その他による多摩川の生体系の変化や鮎などの魚類の不漁、漁業組合による東京市への陳情などの記事からは、多摩川と共に長い間生活してきた人々の暮しが大きな変化をせまられていることが読みとれる。

江戸末期から明治にかけての多摩地方は、多摩川やいくつかの街道によって江戸や横浜と結ばれ、時代の変化にも敏感に対応し、けっして閉ざされた地域ではなかった。江戸以来の生活や文化がしっかりと根を張り、明治十年代の

自由民権運動には大きな役割を果たしているのである。その多摩地方が、この時代には帝都に従属するという立場に立たされ、国や府や市の要請のままに動かざるを得ない様子を新聞記事から感ずるのである。

この時期は、国策にそって生産を高め報国することが多摩地方の課題であり、多摩は充分にそれに応えていった様子が記事から伝わってくる。

一九四一年（昭和十六年）十二月八日、ハワイ真珠灣を攻撃、太平洋戦争に突入する。敗戦までの三年八月間、途中新聞は頁數も少なくなり字も小さくなる。多摩版も縮少され記事も画一的で変化がない。記事から人びとの暮しぶりや今度の戦争をどう思っているのか、何を考えているのか本音はでてこない。

戦時中の福生の記事から少し拾ってみよう。一九四一年「軍都建設に挺身する福生町、挺身隊結成<sup>(30)</sup>」、続いて「内鮮和親会結成会<sup>(31)</sup>」の記事。内容は青梅署管内の小河内貯水池、福生公用施設建築場等の工事場で働く半島出身者は一千余名、内鮮融和と半島人相互の親睦協和、報国精神の向上のために会を結成するとある。戦時中強制的に朝鮮半島や台湾から連れてこられた人々は多かった。こうして福生町を含む周辺が軍都として発展していく一方、大需要に応じて福生町地方を蔬菜栽培地帯化しようという計画もある。「同地方は最近非常な發展を來たして人口の著

しき激増を示しているのと、公用施設などの関係から糞尿の入手が容易なのでこれを利用<sup>(32)</sup>」とのこと。

一九四二年に入ると「伸びる福生町、素晴らしい発展設計成る。区画整理から数年中には大都市建設計画<sup>(33)</sup>」、

「二校を増築、殖える学童に国民学校の教室を増築<sup>(34)</sup>」、「警部補派出所ができる<sup>(35)</sup>」、「買出防止の名案、役場を集荷所に<sup>(36)</sup>」、「決戦食増産講習会開かる。外国からの輸入を止めて国内生産で間に合わせようと<sup>(37)</sup>」の記事がみられる。

一九四四年に入ると食糧不足は一層ひどくなる。「西郡の第二次食糧増産進捗<sup>(38)</sup>。福生町は開田六反歩、客土十三町歩と割当より三割から五割多くの土地改良を行い稀に見る好成績<sup>(38)</sup>」とある。「都の蔬菜に特産地。五大方針でどしどし送る。決定された特産地福生、西多摩、多西など<sup>(39)</sup>」。

一九四五年、敗戦の年、福生に関する記事は次の一つのみ。「新茶ができます。今あるお茶を非常緊急特配用として二月から国民学校の学童を利用して摘始め、福生、瑞穂等の四ヶ所で西郡特有の香り高いお茶を製造<sup>(40)</sup>」で終る。こうしてみると少ない記事からも、戦前戦中をとおして一貫して生産の場として期待され、担ってきた福生周辺の姿が浮かび上ってくる。

では、生産の場であった多摩地方の戦後はどうであったのだろうか。「生か死か」と、人々は命をかけて買出列車

で多摩地方に押しかけ、芋殻さえ飛ぶように売れた。人と藪<sup>(41)</sup>でぎしりの買出列車。闇の物資も横行する。押しかける都会人に自家用で精一杯との農家の声もある。多摩の各村々では食糧危機を乗り切ろうと、ともかく増産を目指し必死である。しかし依然として食糧は不足し、「木材を食べよう、夢ならず完全粉化で栄養も<sup>(42)</sup>」、「モロコシで危機を乗切る<sup>(43)</sup>」というような記事も出てくる。生産地として食糧はまったく不足している。殺人酒（メチルアルコール）、殺人糖（ズルチン）による死亡記事も多い。ともかく「隣人の飢をよそに腹一杯<sup>(43)</sup>」、「働くだけは喰はせろと労働者のデモ<sup>(44)</sup>」、「米不足飯米遅配で休校を考慮、お腹がすぐ体操ゆえに休校を考慮<sup>(45)</sup>」したりと、食に関する記事が多いのはこの時代を映しだしている。しかし「西郡、盛上る共愛の精神<sup>(46)</sup>」、「西郡の新しき村、大地主の土地を開放、自作農にさせる<sup>(47)</sup>」など、西多摩村でも耕地開放、その他各村でも農村文庫、社会学校など新しい試みに再生を託す。

保主的と言われた成木村でも民主的な食糧自給の徹底を試みている。母親学級や村民大会、失業対策などに積極的に取り組み、「放心から起立った成木村、供出も都下第一<sup>(48)</sup>」の記事も見られる。村の声を聞く改善箱も置かれ、バスが開始され、早くも初級中学ができ、村民の民主的習慣が結実したと記事は伝える。とうとう「村営工場を作り塔婆づ

くりまで始め<sup>(49)</sup>」た。成木村の再生への歩みが短い記事から伝わってくる。

ともかく西多摩郡下では、馬鈴薯・大麦・小麦など「努力供出」し、村々は新生のための努力を続ける。福生町でも要請に応じて生産農家は小麦粉・干甘藷・豆類などを隣保愛により供出する。

一方、三多摩地方でも農地改革の前に農民と地主の双方は声を挙げ、「福生町では地主たちが組合を結成し、地主も正しい立場からの主張はすべきである<sup>(50)</sup>」とする。こうした戦後の混乱の時代に誰もが食べることに精一杯で必死に飢と闘っていた時、西郡数馬部落にはじめて電燈がついた。丹波・日原も同様であった。西郡下のあちこちで熊や猿、狐が出没という記事もあり、まだ自然に恵まれていた多摩地方であった。

生産地としての戦後の福生の様子はこのあと新聞には出てこない。米軍の基地の街として多くの問題が生じてくるのだが、それは多摩の女性達の項でとりあげてみたい。ともかく多摩の農家は生産増に熱心であった。一九四七年（昭和二十二年）の始めには西多摩郡の米、さつま芋の供出は都下第一位であり、都民に一俵でも多くと、里に降りず炭を焼き続ける人々がいた。初の鯨肉が配給され、お酒も販売という矢先、八高線転覆の事故が起こり、約百八十名の死者を出す。超満員の買出列車であった。「魔の始発」

ということ、都会の人々が一日がかりで買出しに来る様子がこの事故から伺えた。しかし数ヶ月後には「食いつくした八高沿線、買出しは山梨県へ方向転換<sup>(51)</sup>」とある。買出しの人々は三分の一に減ってしまった。あれ程の買出し部隊にもかゝらず、西多摩郡下の農家の懐はあまり豊かにならなかつたらしい。「西多摩郡、案外な農家の懐、預金は一戸あたり一万円、預金の筆頭は引揚者街<sup>(52)</sup>」とある。加えて、西多摩郡は三多摩の中で最も物価が高かつた。何でも東京通過で高いのだということだった。

生産に力を入れる一方、多摩は観光多摩として飛躍を計ろうとする。連峰を縦横にドライブウエイを、電車を、ケールカーを、ホテルをと国立公園大多摩の構想が練られる。こうして多摩および西多摩郡の農業生産の場としての記事は、これ以後めっきり少なくなり、一九五〇年代、「育苗成に『活』ビニール普及<sup>(53)</sup>」、「都下農家に機械化時代来る。動力耕機を大量購入<sup>(54)</sup>」などに見られるように、農村の機械化、ビニール栽培などが一般的になっていく。また多摩の宅地化もどんどん進み、福生の人口も基地の關係から急激に増えていく。一九五二年（昭和二十七年）には市制を目指して高等学校、病院の充実、火葬場の拡張、永田橋の架設、弁天橋中心に福生遊園地の建設などを検討しつつ、福生市の誕生を待つが、市制が敷かれるのはもう少し先のことになる（一九七〇年施行）。

## 軍都として飛躍する多摩・基地としての多摩

「生れてから死ぬまで、そして死んでからも音に悩まされるなんて、あんまりじゃないですか」。横田基地騒音公害訴訟原告団長、福本さんのこの言葉は鎮痛である。ベトナム戦争の激化で戦闘機の離着陸が激しくなり、昭島市堀向地区は騒音に悩まされ続けている。その一角に踏みとどまり、今日迄住民運動の中心にあって十五年間、提訴からすでに十年以上が過ぎた。これはつい最近の朝日新聞の記事である。基地の問題は現在も進行しつつある私達の日々問題である。古い多摩版を読んできて、今日の基地の問題がすでに戦前に用意されていた事を知った。ここでは二つの事柄を通して多摩が軍都として歩んでいく姿を述べてみたい。村から町、そして市へと発展していく福生を通して、もう一つは小河内ダム建設計画をとおしてながめてみたい。

前述したように、町制の施行される前の福生、熊川両村はいわゆる近郊農業地帯であった。日本のどこにでも見られる農村風景といって良いと思う。しかし多摩は国家の中核機関の集中する帝都に最も近い地方であったので、軍関係の役割を担っていくには最適の場所であった。

一九三五年、福生村は日本航空会社の飛行場誘致に成功し、熊川村でも陸軍の地先の補給部の拡張準備に入る。村

の道路も整備され、壮年団、従軍会なども結成される。青年団、壮年団の活躍の記事も目につく。愛国少女団も誕生した。戸倉村では愛国婦人会への加入率が日本一になったともいう。すでに国家総動員法も成立し、非常時下の緊張状態は続いていた。陸軍用地の買収、小河内貯水池計画でなくなってしまう村、著しい人口増加等で都市近郊農家は耕地を失っていく状況が続く。福生と同様であった。祖先伝来の土地を離れ、小作農化していく自作農、工場に流出してしまう人々などがみられる。この頃になると兵隊の死亡記事も多くなる。記事も敵意むき出しのものが増え「燃え上る三多摩魂、叩きつぶせ米英の暴虐不じん<sup>(55)</sup>」、「蹴散らせ烏合の包囲陣、生命奉還を誓う、われら三多摩の意気高し<sup>(56)</sup>」、「首斬りが上達した<sup>(57)</sup>」、「凄い斬れ味でした。敵十数人バツサリ<sup>(58)</sup>」、「敵の尖兵血祭り<sup>(59)</sup>」というようなあからさまな書き方で敵意をあおりたり、人を殺すことが美談に仕立てられたりした。この時代の異常さを感じさせる。ふり返ってみればまだ半世紀前のことなのである。祖父や父たちの時代だったのだ。

福生、熊川両村は一九四〇年の合併を控え、緑地の整備、総合運動場の整備と、いよいよ軍都立川に次いで飛躍を期待される。調布にも東洋一の飛行場がつくられる。憲兵分遣隊も新設された。軍都建設のために挺身隊も結成され、多数の軍や工事関係者達が集まってくる。

太平洋戦争が始まり、人々は国民服に変わり、食糧は益々不足し、電気、ガス、ガソリンの節約が叫ばれる。娘も子供も畑へ工場へとかり出される。街からはネオンや横文字看板が消え翼賛に街も変貌していく。「スパイ」はどこにでもいる。「売るな国債」、「廃品利用」、「防空訓練」、「不良の取締」、「子だくさんの表彰」、「生めよ殖せよ」と、連日記事は戦時下の様子を映し出す。

軍都をめざす福生町は益々発展の一端を辿ろうとする。区画整理から数年のうちには、大都市建設計画の青写真もでき上り、輝かしい未来が予想されたが、未完成のまま敗戦を迎えるのである。

一方帝都の水がめとして、一九三七年、小河内貯水池工事の着手により、小河内村は湖底に沈むこととなった。村民は団結して反対するが「お歳暮で切崩し小河内村民団結危し<sup>60)</sup>」の見出し、「地主より貧農に厚く、敷地買収方策決す、あす入札、今月中に槌の音<sup>61)</sup>」、「いよいよ明日起工式<sup>62)</sup>」の記事の数日後には「買われる小河内に蓆旗烽起の怖れ、東京市参事会と最後の談判<sup>63)</sup>」、「東京市参事会員ら小河内へ、雪を冒し調査<sup>64)</sup>」という具合である。その数日後には「敷地の大部分すでにブローカーの手へ、由々しき社会問題<sup>65)</sup>」とある。このころ小河内は水源から電源へと計画が変る。この事の意味は大きいと思う。戦力としての電力の必要性からである。

「小河内の評価額うわさ乱れ人心浮動<sup>66)</sup>」とあり、これに絡んで「多摩の鮎を護れ、小河内貯水池工事を目前に沿岸漁業者、全農に縋る<sup>67)</sup>」、「漁業組合員三千名全農支部へ加入、貯水地対策へ猛進<sup>68)</sup>」、「多摩沿岸の一千名生活擁護にやっ起、貯水池に因る賠償問題、代表ら大挙して上京<sup>69)</sup>」と連日記事は続く。一つの村の廃村には多くの問題がともない、未解決のまま進行していく。小河内問題は尾を引き「民家の移転補償三千円平均 応ぜずば強制買収か、買収価に不服村民陳情<sup>70)</sup>」、「小河内、水川と共同戦線買収価引上げ<sup>71)</sup>」、「小河内へ出す金平均五千円位、不服なら強制買収——小野所長<sup>72)</sup>」とある。戦争物万能の多摩川撮影場で、小河内の挽歌として映画化されるという記事もある。「多摩川を奪還せよ、漁民大会開かれる<sup>73)</sup>」、「村の反抗氣勢も下火<sup>74)</sup>」、「貯水池建設のインフレに踊る<sup>75)</sup>」とあり、複雑な問題を抱えながら「いよいよダム建設へ、水川の事務所でけふ開庁の祝ひ<sup>76)</sup>」の運びとなる。「小河内民の移住地は八ヶ岳<sup>77)</sup>」が有力であったし、その後満州に渡った者もいた。このダム建設には大きな二つの問題があったと思う。①戦時の動力確保としてのダム建設。②村ごとの廃村に伴ういくつかの問題。たとえば人々の暮しと生態系の破壊の問題などがある。

TVK(テネシー河域公社)計画は、一九三三年にアメリカの大統領、ルーズベルトが、ニューディール政策として



テネシー河の渓谷流域を総合開発する目的で、大不況のさなかに発足させた。この計画を日本軍部の一將校が単なる不況対策とは見ずに、「動力の国家管理」が目的だと分析していた。実際アメリカはTVAの電力なしには第二次世界大戦を勝ち抜けなかったし、その後広島と長崎に投下された原爆は、巨大なTVAの電力によって完成されたものだという。一九三〇年代の世界経済恐慌による不況は日本をも襲い、TVAの動きに注目していた内務省の土木局は、一九三五年の初頭に冷害と凶作で治安が悪化した東北地方で試みようとしていた。

一九三八年には、電力国家管理法もできる。それと前後して小河内ダム建設も計画されている。完成をみずに敗戦を迎えるのだが、戦後一年目にして早くもアジア第一のダムを目指して工事は再開される。佐久間ダムに始まる一連のダム建設は国土復興の糸口をつかむのみならず、敗戦による戦時賠償をダム建設で支払うことを可能にさせた。これから後、種々の建設による国土破壊が進んでいく。黒部のダムを訪ねたおりに、工事に携わった多くの方々の犠牲を知り、これ程にまでして本当にダムは必要であったのかという想いが強かった事を思い出す。公害問題の「水俣」でも工場設置に先立って、まず安い電力を入手することが先決であった。日本窒素株式会社が植民地であった朝鮮に進出する際も、鴨緑江の水をせき止め電源を確保する

ことから始まった。小河内ダムの建設はおそらく戦争を勝ち抜くための国策に沿った大事業になるはずであった。人々の生活は簡単に壊され自然も破壊されていく。ここが駄目ならあそこがあるさ、とばかりに大陸へ大陸へと旗を振る。

多摩版には満蒙開拓に関する記事も多い。農村の人々は懸命に働いた。郡から府から国からの要請に応じて。しかし貧しかった。貧しい人々にとって大陸は希望の地であった。ダム建設によって村ごと全てを失ってしまう人達にとっても同様であった。どの位の村民が渡満したのか新聞ではわからない。

「満州へ！」の記事は早い頃から出てきている。「大陸めぐす若人達」(78)、「守ろう満州の広野、府訓練所で雄々しく汗の精神」(79)、「北満に『多摩村』 更らに移民を募集」(80)、「大陸、おお新大陸へ。もちろん女性だって雄飛すべきだわ。典型的農村女子青年団、大谷さん」(81)、「花嫁候補売切れ候」(82)、「拓務訓練の受講者殆ど大陸へ」(83)、「時代の鐘は鳴る若人よ、大陸はかく招く、元府立第四高女校長から大陸だより」(84)等の記事からわかるように、満蒙への呼びかけは絶えず続く。一九三二年(昭和七年)に始まる「拓務省第一次武装移民団」として満州におもむいた、東北出身者を中心にした四百数十名を最初に、敗戦時まで、いろいろな形で満蒙に渡った日本人は百万人もい

る。そのうち開拓関係者は約二十七万人ということであった。東北、長野県を中心に開拓農民のほとんどが日本国内での最も貧しい人々であった。敗戦時彼らの大半は奥地に入植していたため、最も大きな被害を受け、しかも最後には国から見捨てられ、棄民となった。さらに国策のもと中国侵略の先兵であったとされる彼らは、加害者としての責任も問われ、いまま戦後は続いているのである。中国残留孤児の問題など、現在も報じられている通りである。満蒙開拓青少年義勇軍の内原訓練所については「侵略戦争における満蒙開拓民送り出し基地の日輪兵舎取りこわし<sup>(85)</sup>」という関連記事が、一九四七年二月二日の多摩版にあった。

### 多摩の女性達(一) 戦前

一九三六年「古里村で連れ出された娘、支那からSOS、悲嘆の父親外務省に泣付く<sup>(86)</sup>」、「西秋留村で夫を探して満州へ、まだ父親知らぬ愛児を背負ひ<sup>(87)</sup>」という記事に続いて「古里村、娘が生んだ嬰兒を実母の手で殺す、赤貧！ 娘を働かすため<sup>(88)</sup>」というような痛ましい記事が相つぐ。戦争は出ていく者も残る者にも多くの悲劇をもたらす。こうした記事はめったに無いことかも知れないし、氷山の一角かも知れない。

非常時のかけ声の下、自力更生運動が展開され西多摩郡

下の村々でも村ぐるみの生活改善、副業への取組み、勤儉貯蓄の奨励がなされ、男手の少なくなつて忙しい農家の女性達はさらに厳しい生活を強いられていく。箱根組合村でもそれまで男達の仕事であった乳牛の飼育などを、女手でもと講習会を開き指導にあたつたり、熊川村でも児童の自力更生のため、豚や鶏を校内に飼い、学費や遠足費にあてたりしていた。慰問袋や千人針の仕事も女達の仕事であった。しかし現金収入の少ない農家にとって税の取立は厳しく、日用品の物価の暴騰などもあって、働き手は軍需工場などに流れるので農家に残る女性達の生活は、けして楽ではなかった。多摩版からは農村子女の身売りの記事は見当らなかつたが、東北や長野の農村では恐慌のしわよせと、一九三〇年代に入つての数年來の凶作により、どん底の生活を強いられていた。東北出身者の羽仁もと子は書いている。「自分の生まれ故郷も東北ですから実に心にかかつて、新聞を読んでは、汚れた衣類を胸も脛も露わにだらしく身に纏っている水鼻汁たれや青鼻汁たれの子供達を自然に目の前に思い浮べておりました。——殆どどこにも窓のない小屋の中に、馬と同居して藁を敷いて寝ている人々が、この日本の同胞の中にも随分あるのです」。彼女は雑誌『婦人之友』の読者らを中心に、一九三五年(昭和十年)以来五ヶ年計画で、東北六県にセツルメントを開き、農村生活合理化運動を進めていた。

日中戦争の始まるころともなると『非常時』は日常のものとなっていく。一九三八年には国家総動員法も成立し、女子学生の献金美談、夫を出征にとられた妻や未亡人達のけなげに家を守る姿、息子を何人も戦場に送り出せて嬉しいという母、靖国で亡き父達と晴れの対面をする児童たちの姿、亡くなった兵隊達を称える美文調の記事などが連日新聞に掲載され、人々の銃後熱をいやがうえにもたかめていく。

「府では銃後婦人団体の足なみ統一<sup>(88)</sup>」を呼びかけ、府の婦人団体は結束していく。日露戦争当時奥村五百子らによってつくられた『愛国婦人会』はこのころになると、出征兵士の慰問や留守家族への見舞にとどまらず、事変以後はより直接の婦人報国運動に乗り出していた。工場、看護事業、公の機関への積極的な進出などである。しかし軍部は官製の『国防婦人会(後の大日本国防婦人会)』を発足させ、家庭の主婦のみならず、工場や会社で働く女性達をも組織していく。「戸倉村では愛国婦人会への加入率が日本一<sup>(89)</sup>」という。婦人欄では「国策委員にまた三女性、非常時に女性はデビューする<sup>(91)</sup>」の記事が目につく。またことにこの戦争は女性達も国も戦争協力の名の下に、女性達は地位向上を引替に、国は公の場に女性達を引入れることで協力体制をより強固にしていた。知識人といわれる女性も、一般の女性も国策に協力していく。村の女性達も

年寄から少女まで農会・愛国婦人会・国防婦人会・女子青年団・愛国少女隊と組織された団体の中で、副業作業に、廃品回収に、献金運動に、留守宅への奉仕活動にと、銃後活動に動員されていた。

戦争は膨大な物資と人間の浪費であった。一九三八年にできた厚生省により『生めよ殖せよ』のかけ声のもと「子宝の誉れ<sup>(92)</sup>」、「村が誇る子宝部隊、無医村でもこのとうり<sup>(93)</sup>」、「輝く優良赤ちゃん<sup>(94)</sup>」などの記事に見られる様に、十人以上の子持家族は表彰され、未来の良き兵隊になるべく、赤ん坊の健康が競われる。しかし「憂ふべし興亜ッ子」の体位低下<sup>(95)</sup>の記事が示すように、学童の体位は著しく低下しており、大人達の栄養も十分ではなかった。

女性達の服装も変わっていった。一九三〇年代も終りに近くなると「花嫁も盛装厳禁、肴は野菜、お客は親類だけ、婚葬を委員会の手で<sup>(96)</sup>」というようにブライベイトな事柄にまで公の目が光ってくる。「西郡、いよいよ今秋からモンペ女軍の誕生、全女子青年団の服装統一<sup>(97)</sup>」とある。婦人欄には「可憐な短いくつ下、時節柄原料の節約から生れる<sup>(98)</sup>」、「お化粧全廃<sup>(99)</sup>」、「女も今に国民服、新しい美へ<sup>(100)</sup>」、「揃ひの下駄ばきカラコロ登校、八市実践高女の英断<sup>(101)</sup>」とあり、くつ下を全廃し『ノー・ストッキング』時代の先鞭をつけた同校が、さらに靴に代る代用品の下駄

をなくことに決定したというのである。この年、若い女性に自粛髪型ロール巻が流行した。しかし、国民精神総動員委員会では学生の長髪禁止、パーマネント廃止など生活刷新案を決定した。節電、廃品回収、金の供出が叫ばれ、「ぜいたくは敵だ」の状況が強まっていく。一九三九年の東京の長者番付一位は屑鉄業者だった。

一九四一年東京府知事に赴任してきた川西知事は、一年後には、愛国・国防婦人会・婦選獲得同盟等を統合してきた『大日本婦人会』の発足に際して、理事長に就任する。こうしてこの会によって約二十万人の女性達の根こそぎ動員がなされ、全女性の組織化が達成された。この年十二月に太平洋戦争に突入する。

翌年の多摩版では「農村女性の心構へ<sup>(10)</sup>」と称し、著名な女流作家や女性教育者達が次々と「よき母となれ、女の生きる道、銃後の主婦の心構へ」などを説き続ける。この年『欲しがりません、勝つまでは』の標語が流行した。

ここで女性知識人の言動に注目したい。多摩版で度々記事に出てくるのは先程の羽仁もと子・説子の親子である。

彼女の学校が北多摩郡の南沢にあったからだ。一九三八年（昭和十三年）「羽仁女史ら北京へ<sup>(11)</sup>」、「自由学園の北京生活学校<sup>(12)</sup>」、「日華融和の役」花を咲かす羽仁女史<sup>(13)</sup>」、「部隊編成で軍隊式訓練、自由学園の試み<sup>(14)</sup>」、「自由学園に支那の姉妹、親切な日本人、この気持を同胞に伝へ

ん<sup>(15)</sup>」、「自由学園に礼状 慰問袋の羊かんに部隊長礼状<sup>(16)</sup>」、「同苦は相愛の始め、国民政府の米英に対する宣戦布告のニュースを聞いて喜ぶ<sup>(17)</sup>」など、彼女に関する記事は多い。北京訪問の感想を彼女は語っているが、「指導、教化する仕事をしているが支那大衆の大部分は日本人の温い手を望んでいるように見受けた」とし、「日華融和の一助となれば、これ程嬉しいことはない」と話している。婦人欄その他での吉岡弥生の発言も活発である。彼女は女性の地位向上を経済的能力に求め、職業人として自立すべからず、東京女子医科大学を設立し教育に当たっていた。この時代において婦人の地位向上、社会参加は国策への協力と一体をなしていたが、その目的のためには彼女自身も内閣直属の教育審議会、国民貯蓄奨励委員のメンバーとして積極的に発言、行動していった。

詩人深尾須磨子は一九三九年、イタリアのムソリーニ首相に日本女性として始めて会っている。社会面に載っている国際電話による会見記が新聞一頁の半分以上を占め、ひとときわ目を引く。感激さめやらぬ興奮ぶりと、詩人らしい美しい語り口に、新聞を読む人々はどう反応したのだろうか。一九四〇年の十一月、日独名流婦人がお茶の会を催し、吉岡、羽仁女史など多くの著名人が集まったと記事は伝えられている。

一九四三年は都制が施行され、多摩は府から東京都にな

った。敗戦の一年前になると新聞は一枚になり、字も小さくなる。女性達も最早銃後ではいられなかった。総出陣の体制であった。

○女性も応召で明い清い心で戦列につこう<sup>(11)</sup>

○兵器をつくる女冥利、職場に死す覚悟<sup>(12)</sup>

○半年に生産十三倍、女子工員も熔接作業に火花<sup>(13)</sup>

○農村女子挺身隊の体験報告<sup>(14)</sup>

○「女子勤労令」に起ち上る職場女性の戦う決意<sup>(15)</sup>

○勝つための非常措置、女子労力根こそぎ動員<sup>(16)</sup>

○府が「生めよ殖せよ」運動、死亡率半減に<sup>(17)</sup>

○翼賛壮年団 結婚奨励に乗出す<sup>(18)</sup>

○福生では大日本母子協会による産育所が開設、出征軍人

遺家族等のための無料分娩、育児相談<sup>(19)</sup>

○新しき結婚の促進、特に名誉の傷痕軍人<sup>(20)</sup>

右のような記事に見られるように、工場への動員や労働力強化と並行しての生めよ殖せよと大きな矛盾に満ちたものであった。一方では家族制度の堅持、良妻賢母教育で家に縛りつけ、他方では国家総動員法の下、女性達を家庭からかり出していく。物の生産も人間の生産も女性達に課せられた厳しい負担であった。

「広島、長崎に新型爆弾か？」という、何が起ったのかわからないといった調子の一連のうろたえた記事の数日後、一九四五年八月十五日「戦争終局、最後の御前会議<sup>(21)</sup>」

の報道があり、戦争が終わった。

## 多摩の女性達 (二) 戦後

敗戦の翌日から数日間は「地に伏して肅然聖恩に咽ぶ宮城前の赤子の群<sup>(22)</sup>」といった調子の記事に並んで、軍関係者の自殺の記事が目につく。広島、長崎の様子が報道され、続いて連合軍本土進駐の記事が現れる。連日「進駐軍」関係の記事に混ざって、くどいように暴行掠奪を心配し「卑屈になるな」、「隙を見せるな」と続く。特に女性に対しては「眉墨が生む錯誤<sup>(23)</sup>」、「進駐地区の女生徒授業中止してよい。神奈川県<sup>(24)</sup>」など婦女子の心構えや注意を呼びかける。人々の不安や心配、混乱が察せられる。早くも九月五日には「米陸軍の各地進駐、八王子三千三百五十名<sup>(25)</sup>」に続いて、「三多摩の進駐軍、司令部商大に、立川・調布・福生・昭和の四飛行場に空路進駐する第八航空隊とともに、三多摩極東警備にあたる<sup>(26)</sup>」の記事が、縮小された多摩版に載る。これからの多摩地方の問題を予測させる。この年の瀬、食なく貧しく連日強盗、追はぎ、殺人などの事件が多発し、犯人には元軍人が多い。殺人電車といわれた大混雑の電車で赤ん坊が窒息したり、栄養失調で死亡する人も、日に七、八人。インフレもますます激しく

「サンマが何と百万円<sup>(27)</sup>」の記事に我が目を疑う。

人々は混乱の中で新しい生活や価値観に対する試みや模

索を続け、とまどいながらも力強い足どりを歩み始める。

一四六六年には新選挙法による始めての衆議院議員総選挙が行われる。始めて選挙権を手にする女性達、候補者にも、一票を投じる者にもとまどいや希望が読みとれる。「婦人参政権へ負おう第一声、めざす政治開眼」川崎なつ、市川房枝、山高しげり、深尾須磨子……(137)の名も見える、「政治は生活、婦人と参政権問題 市川房枝(138)」、「話せばわかる、農村老婆の一票の手習い(139)」などにそれが見られる。選挙当日の女性達の快調な出足。「婦人の出足よし、男子顔まけの立川市(140)」、「棄権わずか29%、婦人も圧倒的誇る投票成績(141)」とあるように、自分たちの考えや意志を表わす時が今やってきたのだ、という嬉しさや真面目さが、投票成績から感じられる。事実、女性代議士の登場はめざましかった。しかし反面「主婦は外で働けぬ、婦人代議士(142)」もおり、当選したものの止めざるを得ない人もいた。

憲法発布、農地改革、労働運動などの戦後の新しい歩みと共に、東京裁判における日本軍の行為などが明らかにされ始め、また神奈川県に始まる天皇の巡幸も精力的に行われている事が報ぜられている。

次に多摩と関りのある「基地」について取上げてみたい。当時全国には六百余の軍事基地があった。しかし多摩版で見ると、見る限り数年間は基地に関連する記事は少ない。敗戦の年、

早くも社会面で「失業の捌け口、復興尻目に女、女、女の氾濫、米兵と銀座にて(143)」が東京の課題として取上げられているが、多摩版では農業の増産、農地改革、村の改革などに関する記事が多く、「三多摩の治安確保、特別警備隊編成、凶悪な強盗事件など郡部の三多摩地区に発生しているのにかんがみ(144)」とあるのが、唯一多摩の特殊な事情をうかがわせる。他には、「多西村の三兄弟、福生の横田飛行場から航空服、長靴、靴下を盗む(145)」、「進駐軍関係労務者の大半は窃盗」の記事があるくらいである。一九四〇年代も終り頃になると、「街の女」の親分捕わる、上野地下道の娘誘惑し甘い汁(146)、「社会面でも「夜の女」追出しに町民大会(147)」とあり、このころからこうした記事が多くなってくる。

一九五〇年六月に朝鮮戦争勃発。ここで福生に関する記事を並べてみると、

○外人との接触の多い町の特殊性から宗教の面でもと教会の設立(148)

○青少年の教育上からも「夜の女」「ボンビキ」への対策(149)

○子供も大ニコニコ、ユ司令官が贈物、福生福音教会で四百名の子供達にミルク・チョコレート・カードなど(150)

○綴方にも「夜の女」立川、福生(151)

○東福生、米軍宿舎から盗んで逃げた男を警備員(日本人)

が射殺、威かくのため発砲したのが命中(18)

○立川・福生にみる混血児の実態、進学には差をつけず、黒人系に多い、『国際都市』の悲劇(19)

○福生ホーム開所式、入所者少いのが心配、日米協力実る

混血児保育所 基地の将校夫人クラブが中心に募金(16)

○横田基地を中心にした関係八ヶ市町村、日米合同委員

会(16)

○米軍立入禁止問題(14)

○赤線区域業者泣き込む、駐留軍の立入禁止でさびれた地

区(18)

○売春取締り強化を要望(14)

○福生ホーム ふえた養子縁組(10)

以上のような記事がみられ、複雑な問題を抱えていることがわかる。福生に限らず基地のある町は、こぜりあい、盗難事件、売春や麻薬の問題、米軍機による事故や被害、交通事故の増加などが共通に見られるのである。こうした問題を、同じく基地のある立川や昭和などと較べながら、子供達と女性達の問題に絞って簡単にまとめてみたい。

西多摩中学では、綴方にも『夜の女』が登場してきたと学校側は大あわてである。同校の教務主任は「子供に刺激を与えるな(10)」と言ひ、「男女生徒間の風紀の乱れを憂いた教師達は純潔教育に起つ(10)」ことになる。立川や福生の場合も同様であった。しかし「立川市の売春取締り、反

面市の巨大財源(13)」とある通り、子供達を取巻く環境は複雑であった。子供達の眼は鋭い。多摩ではないがある女生徒は「これは経済の問題だ」と書くのである。一九五二年ころのいわゆる『夜の女』達は五万人位いた。彼女達が稼ぐ外貨は、当時の国家予算の四〇%前後を占めていたという。ある意味では彼女達が国を支えていた大きな力であったのである。朝鮮戦争における米軍の莫大な軍需物資が、日本で調達され、その特需景気で日本は一息ついた。朝鮮帰りの米兵達の懐は豊かで、基地の町の飲食街は賑わったが、休戦になるとたちまち「休戦が響く立川、なくなるポロ儲け、女性群、酒屋大打撃(13)」の記事の通りであった。

基地の周辺から子供達を守ろうと、準備会が開かれる。問題は多い。「立川第一小学校では飛行機の爆音で授業ができない。『夜の女』がヒロポンを打っているのに警官は黙認している。良家の子女まで立川出身ということ大変な目で見られる。大和村では米軍独立兵舎が建つため三千名の入夫が居るのに、交番には警官一人が五日間いるだけ。基地周辺の商店は日本人を相手にしない。大和村では、次、三男が基地へ勤めさせてもらいたいと言っているが純朴な農家の青年の落ちる先は決っている」など、子供達の住む環境はさまざまな問題があった。農閑期の農家の離れを借りる女性達、新築の置屋(アパート)等も増え続ける。

大人達の生活を身近に見聞きする青少年達は投げやりになりがちで、夜遊びやパチンコなどに走ったり、相次ぐ犯罪や家出、自殺の記事も多い。しかも基地の町に住んでいるという差別や偏見に対して、それをはねのけて生きていく事は大変な事であった。

新たに大和村や武蔵野市に基地や兵舎ができてつつあった。反対運動は押えられ、大和村では仮渡しの日が来た。「無表情なその日の住民『純粋な反対運動』も過去へ。『夜の女』追放へ申合せ、日本一の基地の街を志す。立川のテツをふまないという空気みなざる(88)」とあるように、事が起こっては対処をせまられ、万事が後手／＼に回る立川市を他の町は見えており、この記事からも何とか問題を回避したいという大和村の様子が伝わってくる。

福生の場合も同様で、混血児収容施設や米軍立入禁止令については、事の大きくなる以前に先手を打って解決を計ろうとする姿勢があり、かえって問題の本質を見えにくくし、複雑にしているところがある様にも見受けられた。

一九五〇年代に入ってからの記事は、基地の女性達に関するものも多いが、それは取締る側からのもので、肝心の女性達の思いや生活はあまり浮かび上ってこない。また女性達の周辺の人々、たとえば離れを貸している農家の人、アパートの隣人、身内の者などの対処や反応が今一つ記事からはわからない。ただ、このころの盗難事件の多くが米

兵宅や彼女達のアパートへの侵入であり、当時人々が持ち得なかった品々を彼女達は持っており、その意味では豊かな生活でもあったようだ。

彼女達を悲惨という目だけで見るとしたら、少々違うかもしれない。女性達は颯爽としたファッションで当時の若い女性達の最先端を行っていたし、英語を操る者も少なからずいた。年齢も様々であったし、記事によれば高学歴の者もいた。良きにつけ悪しきにつけ、彼女達を手本に時代が動いていた一時期があった。

しかし、彼女達の多くは貧しさから、生きるためにやむなくというケースが大半を占め、あるいはアメリカ兵に、当時の日本男性には無い魅力を感じ恋愛したもの、結局は捨てられたり、別れざるを得ない(米軍側は米兵と日本女性の結婚を望まなかった)、兵隊達は朝鮮に飛ばされたり本国に帰されたりした)ケースも多かった。そういった女性達が『夜の女』になるという事も少なかった。いざれにしても女性達のこと、もう少し時間をかけて調べてみたいと思う。

一方では「稼がぬと殴られて訴え、部屋、メシ代も払わぬ夜の女(89)」の記事もあるように、そうした女性達をくいものにする人達もいた。こうした記事を読んでいて感じるのは「殴った方」は問題にされず、「メシ代も払わぬ夜の女」の方が強調されている点である。一つの事件に潜む



多くの問題点が、根本のところでは取上げられず、毎日同じ様な記事が出ては消えていく。記事を書く方も、固定されたイメージで人や事件を見ている所があり、「夜の女」に關する記事にそれを強く感ずるのである。

女性と米兵との間に生れた混血児は、就学期を迎えるようになる。福生町の混血児の実態も、

○見当つかぬ混血児の入学実数、半数無籍、有籍は日本人名、福生町の場合有籍者は十二、三名中わずか二名(167)

○「福生ホーム」十五日から收容、四十名の收容能力に対し四名確定、二名未定(168)

○「福生ホーム」を社会福祉法人へ、混血児に国庫補助(169)

○「福生ホーム」ふえた養子縁組、今後は日米委員会が世話(米側の申出)(170)

○「福生ホーム」養子縁組の混血兄弟、渡米の旅、幸福に……と喜ぶ関係者(171)

○無籍の混血児をめぐり実母と養親が奪い合い、基地の街、福生の話題(172)

○「福生ホーム」里親のトムプソン大尉から便り「マーシヤちゃん元氣」マイク君も米国へ(173)

○「福生ホーム」きょう開所記念、いまままでに五十八名。養子縁組も二十一組、一人渡米、現在十一名(174)

とある通り、福生の場合、混血児はホーム收容という形

をとり、養子縁組にも積極的であった。同時期「エリザベスサンダースホーム」では、ホームから公立小学校へ通う子供がいたが、受持の教師は猛獣扱いたという。猛獣を飼育し、社会性をつけさせてはじめて他の子供達と一緒にするのだというのである。混血児達は社会の中で疎外され、問題児扱いされ、なかなか心安まる場所が無かった。アメリカ側も養子縁組には積極的であったようだが、渡米した彼らのその後はどうなっているのだろうか。多くの無理解な人々の中で暮すよりはその方が良かったのだろうか。施設という隔離された場所で育った子供達は、同じ混血児でも家庭で育った子供達よりさらに多くの差別や偏見と闘わなければならなかったに違いない。彼らは母親達よりもさらに厳しい運命を生れながらにして負っていたといえるだろう。

なお、最後に当って多摩地方なら当然取上げるべきと思われる養蚕および織物業とそれに従事する女性達の事、各地で起きていた小作争議の件、多摩川流域に生活する人々の様子など全く触れなかった。個人的な関心に絞ってしまった、それも単に記事を追うだけに留まってしまったのは、私の勉強不足のせいである。新聞の「多摩版」からだけでは得た知識では、間違っても多々あると思うが、これからも新聞資料の検索を続けてゆきたいと思っている。

今回「近い過去」の記事を読み、まとめてみて感じた事

は、つくづく戦後は未だ終っていないということである。各々の痛みや恨みを重く内に抱えこみながら生き続けている人々が、どんなに多くいることか。戦前、新聞その他で活発な活動をしていた文学者や知識人達が敗戦の後、どの

様に自分自身にも社会にも対処してきたのだろうかというのも改めて考えさせられたことであった。数十年前の過去は今、私達に、どの様に生きていくべきかを問いかけているように思われた。

(うちだ・さちこ) 福生市史近代調査員 渋谷区在住)

(注) 本文中に番号が付してあるものは、左記の日付の「読売新聞」に掲載されているものである。

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	昭和10年1月15日
11月12日	11月7日	10月27日	10月19日	9月3日	8月25日	7月26日	6月2日	6月2日	5月15日	5月10日	3月21日	3月1日	2月26日	2月21日	2月21日	1月24日	
34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	昭和10年11月15日
17年2月8日	11月2日	4月30日	16年3月1日	11年4月14日	7月23日	10年11月30日	10月1日	3月17日	12年8月27日	10年10月26日	14年6月30日	12月13日	12月6日	11月30日	11月28日	11月28日	
51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	昭和17年3月27日
21年11月5日	24年1月15日	8月15日	"	6月30日	4月24日	"	5月15日	5月8日	21年5月4日	20年1月21日	12月3日	19年3月25日	8月4日	18年10月17日	6月16日	6月16日	

74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	12年	"	"	14年	"	16年	28年	27年	"	昭和22年
8月25日	3月20日	3月17日	3月16日	1月29日	1月23日	1月16日	2月23日	2月5日	1月30日	1月27日	1月17日	1月13日	1月5日	6月7日	1月24日	1月10日	12月10日	16年12月9日	28年3月31日	27年2月6日	7月24日	8月13日

97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75
13年	16年	13年	16年	15年	13年	14年	13年	"	"	11年	22年	"	"	16年	14年	11年	"	16年	"	"	"	昭和12年
7月10日	8月26日	5月7日	5月18日	7月2日	5月25日	1月6日	2月24日	5月12日	5月3日	4月15日	2月1日	5月30日	"	5月16日	1月12日	12月17日	5月15日	4月30日	8月21日	10月2日	9月24日	9月14日

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98
"	19年	18年	16年	"	"	"	"	"	19年	16年	"	"	"	"	"	13年	17年	"	"	15年	"	昭和13年
11月29日	6月3日	3月3日	5月15日	11月12日	7月25日	4月11日	7月12日	3月11日	2月11日	1月10日	10月26日	9月24日	"	9月23日	8月26日	8月14日	17年3月3日	"	9月15日	7月13日	8月5日	7月21日

143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121
27年2月8日	" 12月26日	" "	26年6月3日	" 2月14日	24年2月26日	22年1月17日	" 8月8日	21年1月26日	20年11月14日	" 4月27日	" 4月12日	" 4月11日	21年4月4日	" 9月30日	20年9月25日	21年1月4日	" 9月12日	" "	" "	" 9月5日	" 8月16日	昭和20年8月15日

165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144
" 7月3日	" 6月13日	" 7月19日	29年1月22日	" 10月31日	" 9月23日	" 7月5日	28年1月11日	27年8月12日	" 7月16日	28年6月7日	" 8月7日	" "	27年2月8日	" 10月31日	" 10月28日	" 9月14日	" 9月12日	" 8月21日	28年7月5日	" 12月9日	昭和27年10月21日

参考文献(主なもの)

- 『日本女性史』現代 女性史総合研究会
- 『銃後史ノート』女たちの現在を問う会
- 『岡村昭彦集』(5) 岡村昭彦
- 『記録現代史』(9) 鶴見俊輔